薬事日報　2026（令和8）年3月6日　金曜日

薬剤師の専門性発揮を

副作用の的確な判別で

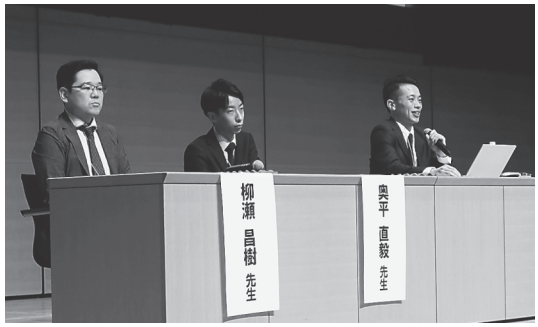
日病薬近畿学術大会

2月に大阪市で開かれた日本病院薬剤師会近畿学術大会のシンポジウムで各病院の薬剤師は、副作用の的確な判別に薬剤師の専門性を発揮するよう呼びかけた。目の前の症状が副作用に該当するのかを的確に判別することは、副作用の重篤化防止だけでなく、薬の影響ではない場合の投与中止を防ぎ、患者の薬物療法の選択肢を守ることにもつながる。演者の薬剤師は、症状と添付文書情報を照らし合わせるだけで副作用の可能性を判断するのではなく、臨床所見や経過、検査データなどを総合的に評価し、病態生理を踏まえた薬学的視点から判別してほしいと語った。

東住吉森本病院薬剤部の佐古守人氏は、「副作用の不十分な把握や評価が患者の治療薬を奪っている可能性を、私たちは認識できているか」と投げかけた。

副作用が疑われる症状には、真の副作用と副作用ではないものが混在している。薬剤師が機械的に患者の症状と添付文書を照らし合わせて副作用疑いと決めつけてしまうと、その薬の投与が中止され、本当は副作用ではなかった場合に患者から治療薬を奪うことになる。

佐古氏は、病態生理と薬学的視点、個々の患者の状況を踏まえて副作用を適切に評価することが重要と強調。「副作用の適切な把握と評価によって、『これは副作用ではない』と医師に自信を持って言える薬剤師であることが大事。そうなれば患者の治療薬が守られる。本当の副作用の場合には伝えることで、患者を副作用から守ることができる」と話した。



佐古氏（右）ら各病院の薬剤師が具体的な症例をもとにポイントを解説した

暖生会脳神経外科病院薬剤部の奥平直毅氏は、具体的な症例をもとに、病態生理を踏まえて薬剤性めまいの副作用を判別するポイントを解説した。

提示した症例は、発熱と倦怠感で同院に来院し、尿路感染症の疑いで入院した高齢の女性。入院期間中に抗菌薬が投与されたほか、排尿困難を受けて治療薬が追加され、持病の高血圧に対して持参した降圧薬投与を再開したところ、退院日近くになって患者からめまいの訴えがあった。

経過を調べると、入院時に高かった血圧は入院後1週間で大幅に低下していた。血圧が低下し脳幹や小脳に送られる血液量が減少すると、中枢性めまいが生じる可能性がある。通常、血圧が多少変動しても脳血流量は一定に保たれるが、慢性高血圧患者ではこの自動調節機能が変化し、血圧低下時の影響を受けやすくなる。

患者に聞くと、持参した降圧薬は日常的に服用していなかった。奥平氏は、入院後に降圧薬を規則正しく服用し血圧が急激に低下したことが、めまいの要因になった可能性があると推定した。これらの病態生理を踏まえた考察の結果を医師に伝えたところ、降圧薬を中止し経過を観察することになったという。